追悼抄

インを旅した。老
な、かの地の人々
れた。以来、たび
ラメンコなどにも

葬儀は似合わない」
る三日前、地元の
を受けさせ、告別
会で営まれた。フ
奏でられ、ダンサ
いステップに見送
。

この一日を懸命
本当に明日、死
しれないのだか
れた「追悼のし
文が記された。
感じで、いつも
告別式でギター
を弾いた北御門さ
返る。

「きみのギャ
二十五年前、ス
奏を初めて引き
た。「五千円です
すぎる。もっと自信を持ちなさい」
と、ポケットマネーから一万円を差
し出した。九州一周の朗読公演を開
くなど二人で各地を回った。感情を
込めたエネルギッシュな朗読に、何
度も背筋が震えた。

真花さん、北御門さんらは天本さ
んの足跡を故郷に刻もうと「記念
館」開設を計画している。一周忌
には生前の願い通り、スペインのグ
ヮダルキビール川に遺灰をまくつも
りだ。

（野田 一紀）

感情を込め、スペインの詩を朗読する天本さん（1995年ごろ）＝北御門義幸さん提供

話題
2003/5/11

口、肺炎
、77歳）

大胆発想の「闘う研究者」

元生物物理学会会長 理化学研究所グループディレクター 松本（まつもと） 元（げん）さん

物理学界の異端児だった。強烈な個性の持ち主で、不死身ともいわれた。それが入院二日目、桜の開花を待たずに逝ってしまった。

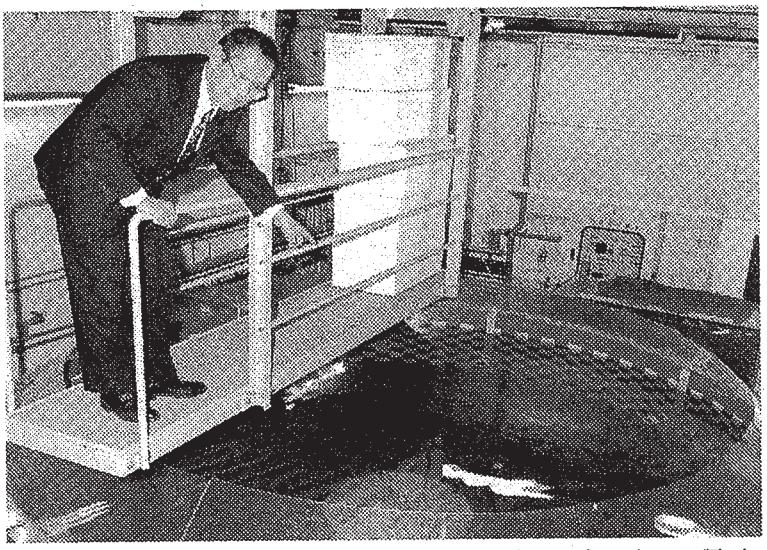
昨年、体調を崩し十五キロもやせた。自宅で安静に入ったのが一月。ふとんの中でバイオリンの巨匠D・オイストラフの協奏曲と、古今亭志ん朝の古典落語を聴き続けたという。

「ヤリイカの元さん」で有名だった。不可能とされたイカの人工飼育を世界で初めて成功させた。驚いたノーベル賞受賞者で動物行動学のK・ローレンツ博士がわざわざ確かめにきた。

人工飼育はヤリイカの神経興奮機構の解明に役立ち、ノーベル賞受賞者A・ホジキン博士らの定説を〝覆す〟荒業をやってのけた。日本人離れした大胆な発想と先見性は、世界の著名な学者やトップ企業の経営者たちを何人も虜にしている。

もとは物理学だが、「これからは生き物の科学技術が必要」と、一九七〇年代に生物物理学を始めた。

「生物と機械をひとつに包み込むたぐい稀なシステム思考で、時代の先端を走った」。伊藤正男・理化学研究所脳科学総合研究センター所長は弔辞で、天才肌の仲間を惜しんだ。



長期飼育に成功し、ヤリイカを仲間のように世話する松本さん（1999年12月、理化学研究所で）

神経伝達には微小管（たんぱく質の繊維）の働きが不可欠だと提案し、大論争を巻き起こしたことがある。

「元さんの登壇する学会は度々論争が火を噴き、周囲の研究者を興奮の渦に巻き込んでいた。でも負けたためしがない。いつも闘う研究者でした」。理研で研究仲間の市川道教さん(45)はそのカリスマ性にほれこんでいた。

九〇年代には脳科学に転じた。脳の原理に学ぶ新しいコンピューターを実現するためだ。名著『愛は脳を活性化する』（岩波書店）で、「脳は意欲で働くコンピューター。意欲を高めることで脳を活性化できる」と、独自の理論を提起した。

「聖書は人間の可能性を説き、脳科学に合っている」。入信も洗礼も受けなかったが教会に通い、心とは、脳とは何か、を問い続けた。

ひと懐っこい性格でもある。日焼けした表情で度々快活な談笑に興じていた。「初めて会った時でも友人のように温かく、不思議な人でした」。数学者の広中平祐・元山口大学長(72)は、こう人柄を偲ぶ。

最後の闘いは肝硬変とだった。学問の業績も死もが余りにも早すぎた遺影に、仲間がそっと声をかけた。

「元さん、もう闘わなくていいんだよ」

（浅羽 雅晴）

（3月9日、特発性細菌性腹膜炎で死去、62歳）